

連載 第19回 福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

大正から昭和にかけて

1、三十三世住職・及川眞能上人

前回までは、「常円寺の起立」にはじまり明治期までの当山の歴史を通観してきた。今回からは時代を進めて観ていく。第一回は、現在の常円寺の大きな事業の柱である「子弟教育」の礎を築いた、三十三世及川眞能上人である。上人は明治四十年九月、三十二世住職齊藤龍妙上人の遷化に伴い、八王子本立寺から入山する。

その人の生涯は死の儀相に表れる。ともいうが、上人の遷化の様子が、一周忌に発行された『及川丹溪追憶集』(以下『追憶集』)に詳細に綴られている。

昭和十二年三月、流行性の感冒から肺炎を患った上人は、同月十九日、自ら翌日入院すると仰せになり、信濃町の慶応病院に入院される。その知らせを受けた、弟子で、当時本山平賀本土寺の住職であった山田日真上人が病院に駆けつけ、師の臥す病室の扉を開けると、病室の壁には縁祖日真上人直筆の小本尊がかけられ、御枕辺の方から香の煙がたなびいていた。傍らには法縁の先輩達が青さめた顔で立ち、日真上人はその合間を縫って師の床に寄り添い師弟の対面を果たす。師からの語りかけに、日真上人は言葉にならない言葉を発するのがやっとであった。弟子の言葉を聴き終えると、師は、「二度ばかり軽く首肯されたが、爛たる御臉には涙が一パ

イ浮んで、御安堵の色も漲つたよう」な表情を浮かべ、しばらくして「長い口の硝子の水差を御口に寄せると、大方一パイをゴクンゴクンと嚥下」されると、最期の時を迎えるため、身支度を整え始める。臨終の際に着ず清浄衣が平素から用意しており、弟子の及川眞能上人にもつてこさせると、身体を清め、呼吸の乱れる中、傍らの人々の手伝いを得ながら、白衣、法衣を召され床に横になる。

珠数を合掌の上につけ、いと心地よげに感じられた時、『サ―御経を讀んで』とあったので、我は驚いてお自我憐を誦し始める。一同は病院隣室に降りつゝも比較的声高々と唱和する。久遠偈を二返ばかり繰り返して御題目になると、屢々珠数の掌を心持ちあげて唱題

の音が聴へる。此の間綿に湿した水をあげると、よく舌で水を絞られたが、なかなか力があつた。斯くて御題目の七八十返も唱えたかと思ふ頃、看護婦は吸入酸素の出口を締めるし、主治医の田中博士は、突然脈拍の手を離し、左手の時計を収め、懐中電灯で眼瞳を検し、立上り、流石は御出家、恐れ入った立派な御最後、余は臨床三十余年未だ曾て此の様な要如たる臨終に接したことがない。随分お出家の死にも立会ったが、今日ばかりは敬服しました。誠に尊い



33世住職 及川眞能上人

生きた教訓を拝しましたと、感慨深い面持ちで撫然として語られました。此の時午後の四時十分過ぎであった。己の死を悟り、自ら装束を整え、読経、唱題の中、最期を迎える人、臨終を自らの手で整えることができないのが世の常であるが、上人の最期は、まるで古の高僧伝のような姿である。僅か七十年前の常円寺住職にそのような方がおられたのである。

眞能上人は、安政元(一八五四)年十月十日下総国香取郡飯高に生れる。文久二(一八六二)年九歳の時、佐倉昌柏寺の住職で、伯父の大給日宏上人に就いて剃髪、元治元(一八六四)年、十一歳から八王子本立寺住職安原學能上人に師事する。その後、明治

五(一八七二)年十月より同十年六月まで大教院において修学する。大教院とは近代日蓮宗の三傑の一人と称される新居日薩上人が、明治五年に芝二本權承教寺に設立した僧侶の教育機関(設立当初は

宗教院、明治八年より大教院と称される)で、のちに国社会を起す田中智学とは同窓であった。この機関は地方にも設立され(中教院、小教院)、上人は修学を終えると、京都市中教院の「助教」となり教化に努めた。上人の生涯をかけた子弟教育への情熱はこつした修学や、教導の経験により築かれたのであろう。このほか、宗門内外の要職にも任じられ、大正十三年八月には権大僧正に昇叙せられた。明治十三(一八八〇)年一月、上人は初めて丹

後宮津本妙寺の住職となる。二十三(一八九〇)年五月、師跡を継いで八王子本立寺の住職になり、そして、四十(一九〇七)年十一月、常円寺住職となる。在職時には、檀家であった辰野金吾博士(東京駅などの設計者)の協力を得、客殿庫裡等の新築を行った。この後大正十(一九二一)年五月、千葉県の本山平賀本土寺に榮進し、昭和二年(一九二七)十月には、京都の大本山本願寺五十世の親座に登った(常円寺歴代住職中で大本山貫首となつたのは上人が唯一である)。上人は在職した各寺において、伽藍の営繕と子弟の教育、檀信徒の教化に努めた。特に子弟教育への熱意は、僧侶の資質向上を目的とした「財団法人日蓮宗真統会」の設立として結実し、上人は五百ヶ寺を束ねる当会の総裁に就任する。

『追憶集』では上人を常円寺の「中興」と称する。三十五世として再び常円寺住職となつた昭和六(一九三二)年に、宗祖六百五十遠忌報恩記念として、当時東都一と称された本堂を新築しており、この事跡からしても「中興」と称されるにふさわしい住職といえよう。

最晩年には鐘樓の再興に着手するも、残念ながら工事半ばにして遷化されたが、再興は後継となつた一番弟子の柴田一能上人の手によって完成した。この鐘樓は、太平洋戦争の戦火をくぐり抜け、平成の世に至るまで新宿高層ビル街の一風景として親しまれていく。平成四年には、祖師堂建築に伴い鐘がビル屋上に上げられ、さらに高層ビル街の新宿にふさわしい梵鐘となつた。一方、鐘が下り下げられていた鐘樓堂は、眞能上人の弟子で、戦後常円寺の復興に尽くした及川眞能上人が設立した、立正大学熊谷校舎に移築し現存している。こつして眞能上人の子弟教育にかけた熱意は、その梵音とともに今もなお受け継がれているのである。(つづく)